

巻頭言

子ども・若者フォーラム2014

藤田 徹(NPO法人ワーカーズコープ代表理事)

私たちワーカーズコープの子育て関連事業は、2002～2003年の学童クラブの運営から、本格的に広がっていきました。その時期は小泉内閣が掲げる規制緩和・民営化路線が推進され、指定管理者制度の導入をはじめ「公共の市場化」が強力に推し進められようとしていた時期でもありました。

私たちはそういった流れに対して「市場が支配する公共」でも「官が支配する公共」でもなく、「市民が主体者となる公共づくり」を掲げ、当事者である市民の立場からの提案を全国各地で行っていきました。そういった理念への市民の共感と協同労働が生み出す実践が評価され、子育て分野の仕事おこしが全国各地に広がっていきました。当初、内部の研修を中心に行っていた全国研修会を6年程前、この全国フォーラムに発展させることを決めたわけですが、それは子どもを取り巻く状況の深刻化を前に、私たち協同組合陣営はもちろん全国の自覚ある団体や市民が横につながり、大きな運動を巻き起こしていく必要を痛感していたからです。

全国集会としては4回目となる今回のフォーラムは、①「子育てフォーラム」か

ら「子ども・若者フォーラム」へと幅を広げたこと、②50周年を迎えた子ども白書編集委員会との連携が実現したこと、③そして何より、当事者である子ども・若者の参加を中心に据えたことなど、これまでにない特徴ある集会となります。

参加された皆さんが、今集会の「学び」や「つながり」を各地の子ども主体の実践と子どもや若者たちが豊かになっていける社会づくりにつなげていっていただけることを心より期待しております。

本日は700人近い方が参加されました。明日は800人くらいの方が参集される予定になっております。今日の報告の中で、「自分たちは仕事のできる小学生」という、鹿児島県国分ほのぼの学童の子どもたちの言葉が非常に印象に残りました。子どもたちの話ぶりと取組みから「協同」の価値やパワーが伝わってきました。

フォーラムの歴史を振り返りますと、第1回の記念講演は大和久勝さんでした。「困った子は困っている子」というテーマで、社会に広がっている様々な困難な子どもたちをどうみるのかが問われる集会でした。

第2回と第3回は東京大学名誉教授の太田堯先生を招いての集会でした。子どもや人間をとらえるときに、命の特徴に注目することの大切さを話されました。ひとの命は一つ一つ違うしその中に育つ力がある、そして豊かな関係性の中でこそ命は育つのだと言っておられたことが鮮明に残っています。また教育の前に学習があると太田先生は言うておられました。

そういった歴史をうけて今日の集会は「当事者主体とはなにか」が問われた集会でした。多くの子ども若者たちが発言しましたが、子どもや若者自身が問題の所在や解決するすべを知っているし、それを解決する力が彼らの中にこそあるということが理屈ではなく、よくわかる初日の集会となりました。ある意味決着がついたのではないのでしょうか。「支援」という言葉は協同労働にはふさわしくありません。ともに育つということです。そのことの意味がよくわかった集会であったと思います。

ホームレスを生み出す社会をどう変えるのかという報告もありましたが、様々な問

題が噴出する構造の根本を変えていく一歩を踏み出さないといけないと思いました。失業はもちろん、使い捨てる労働そのものが若者就労において広がっています。原発での労働、貧困、性的被害、派遣等々もです。営利企業や貧困ビジネスに対抗する力を持たなければ、子どもの命は守れないところまで来ています。ワーカーズコープは10年前から子育て分野の仕事を始めましたが、市場万能主義が吹き荒れている中で、われわれ身内だけの研修やフォーラムだけではだめだろうということで、今の現状を変えていこうという人たちといっしょに開催してきた経緯があります。

ぜひ毎年この集会を主催していきましょう。今年度も各地域での集会を開いてきましたが、来年も地域ごとの子ども・若者フォーラムを開催し、その輪を広げていきたいと考えております。

ワーカーズコープでは今、学校をつくろうということが始まっていますが、「こんな学校を創ろう」というものがあったら、ぜひ感想文に書いていただきたいと思います。